

波羅提木叉の比較研究

辛 嶋 静 志

現存する諸々の戒経は部派分裂以前の共通の Urtext に遡ると考えられ、その Urtext は正規の梵語ではなく、ある種の俗語で伝承されていたと考えられる。その Urtext から部派分裂を経て、今日伝わる形になるまでには、幾度も言葉の置き換え或いは翻訳がなされたと思われる。今日伝わるパーリ・梵・藏・漢語の戒経の表現の相違点は往々にして Urtext の俗語形に対する解釈の異なりに起因すると考えられる。逆に、今日残存する戒経の諸本を細心に比較することで、それらが共通に遡る Urtext の姿を推定することも可能だと考えられる。私はそこで以下の六つの点から諸戒経の比較を試みたいと考える。即ち、1. 付加、2. 誤った(仏教)梵語化、3. 書体の類似による誤り、4. (仏教)梵語化に伴い語彙を換える、5. 文法の問題——*ṇamul-abs.* と格の問題を中心に——、6. 波羅提木叉経の Urtext の言語。ここではそのうち、2 と 3 に関する幾つかの例を挙げることにする。

2. 誤った(仏教)梵語化

例 1. *pratyaya-* / *pratyeka*

パーリ戒経の波逸提法第47に、*paccaya-* (“requisite, medicine [= *gilāna-paccaya-bhesajja*]”) という語があるが、対応する梵本には、*pratyaya-* (do.) とあるものと *pratyeka-* (“個別の”) とするものとがある。即ち、

Vin IV 102. 38. *agilānena bhikkhunā cātu-māsa-paccaya-pavāraṇā sādittabbā* (“病気でない比丘は四カ月間だけ必要な物 [具体的には薬] をもらう自恣をうけてよい”) *pratyaya-* とするのは、説一切有部戒経の次の写本である：PrMoSū (Sa) (Finot : 520. 8). *pratyaya-pravāraṇāyā* (v. l. *pratyeka-p°*) ; PrMoSū (Sa) (Simson : 11 = SHT. 43, Bl. 38. R. 4). *prattiyaya* 十十。

これに対し、大部分の梵本には *pratyeka-* とある：PrMoSū (Mā-L) (Tatia : 26. 27). *cāturmāsikā bhikṣuṇā pratyeka-pravāraṇā sādayitavyā* (“比丘は四カ月の、各自別々の自恣を受けてよい”) ; PrMoSū (Sa) (Simson : 262, パリ写本 HO 1).

pratveka-pravāraṇāyā; PrMcSū (Sa) (Simson : 264, パリ写本 HP). pratyeka-
[pra] + + +; PrMcSū (Sa) (Simson : 68, SHT. 92. AW n, V. 3). pratyeka-
pravāraṇāyā; PrMoSū (Sa) (Simson : 221, SHT. 477, Bl. 208, v. 5). pratyeka-
pravāraṇāyā; PrMoSū (Mū) (Banerjee : 42. 16). [pratyeka-pravāraṇāyā];
PrMoSū (Mū. tib) (Vidyabhusana : 92. 9). so sor 'gron (v. l. mgron) du bos pa.

この例の場合, pa. *paccaya* = skt. *pratyaya* が本来的であり, *pratyeka* は間違
った梵語化と考えられる。この誤解の過程には母音の口蓋音化 (palatalization)
が介在していたと考えられる。図式で示せば次の様である¹⁾。

skt. *pratyaya* → (palatalization) **pratyeya*-(cf. pkt. *patteya*) ⇒ *pratyeka*-
あるいは, skt. *pratyaya* → *paccaya* → (palatalization) **pacceya*- ⇒ *pratyeka*-

例 2 : *anyā*- ≧ *aññā*- (pkt. *aṇṇā*-) ≧ *ājñā*

(1) パーリ戒經の波逸提法第12, Vin IV 36. 37. aññāvādake vihesake, pāciti-
tiyaṃ (“別の事を言って, 悩ませれば, 波逸提である”) に対応する大衆部系説出世
部や有部の梵本では *anyā*- (“別の”) と梵語化されている: PrMoSū (Mā-L) (Tatia
: 20. 5). anvavāda-vihimsanake; PrMcSū (Sa) (Finot : 505. 1). anyāvāda-
viheṭhanāt; PrMcSū (Sa) (Simson : 98 = SHT. 99, Bl. 21R). anyāvāda-viheṭha-
nāt; PrMoSū (Sa) (Simson : 13 = SHT. 73, V). [a]ny.

これに対して根本説一切有部の文献では *ājñā* (“命令”) とある: PrMoSū (Mū)
(Banerjee: 33. 7). ājñā-viheṭhanāt, pāyantikā (“命令を犯すことにより波逸提があ
る”); PrMoSū (Mū. tib) (Vidyabhusana 78. 9). bsgo ba rna la gzon na, ltung
byed do; Mvy. 8433. ājñā-viheṭhanam. bsgo ba bcag pa; T. 23. 778c26.
若復苾芻違惱言教者, 波逸底迦 (= T. 24. 504a20, 577c16).

これは, skt. *anya*- (“別の”) が, MI で pkt. *aṇṇa*-, pa. *añña*- となり, それ
が skt. *ājñā*- (“命令”) の MI 形. pkt. *aṇṇā*-, pa. *aññā*-, と混同されたものと
思われる。注目されるのは, 説一切有部の戒經で *anyā*- と, 長母音 *ā* が現れてい
ることである。有部と根本説一切有部の戒經が共通に遡る Text で既に *aṇṇā*-
あるいは *aññā*- と誤っていたと推定される。この過程を図式で示すと次の様にな
る。

skt. *anya*- → *añña*-(*aṇṇa*-) ⇒ (誤って長母音化) **aññā*- → PrMoSū (Sa). *anyā*-
⇒ PrMoSū (Mū). *ājñā*-

(2) 上は *anya*- が *ājñā*- と誤られる例であったが, これとは逆の誤った梵語化

の例も見られる。

まず、パーリ戒経で *aññātaka-* (“親戚ではない”), 説一切有部・根本説一切有部の戒経で *ajñāti-* (同) とあるところ, 大衆部系説出世部 (Mā-L) の戒経では *anyātaka-* とあるが (e.g. Tatia : 14. 1, 14. 4), これは pa. *-ññ-* あるいは pkt. *-ṇṇ-* (<skt. *-jñ-*) という発音を *-ny-* と表記したもので, 語義上の違いはない。

ところが, 次に挙げる例では Mā-L が語義を誤解したことを示している。即ち, パーリ戒経の捨墮法第27 (Vin III 259.5) の *aññātako gahapati* (“親戚ではない居士”), PrMoSū (Mū) (Banerjee : 30. 9). *ajñātiḥ gṛhapatir* (同) に対して, PrMoSū (Mū-L) (Tatia : 18. 1) には *anyataro gṛhapatir* (“或る居士” cf. T. 22. 552a2. 居士) とある²⁾。これは, skt. *ajñātaka-* (“親戚ではない”) の MI 形, pkt. **añṇāyaa-*, pa. *aññātaka-* が *anyātaka-* と表記され, さらにこれが skt. *anya-* (“別の”) の派生語と誤解され, skt. *anyatara-* (“或る”) に置き換えた結果と考えられる。

skt. *ajñātaka-* > pa. *aññātaka-* (pkt. **añṇāyaa-*) > *anyātaka-* ⇒ *anyatara-*

3. 書体の類似による誤り

パーリ戒経, 僧残法第4 (Vin III 133.12-13). *yo pana bhikkhu ... mātuḡā-massa santike atta-kāma-pāricariyāya vaṇṇaṃ bhāseyya, “etad aggaṃ, bhagini, pāricariyānaṃ yā mādisaṃ silavantāṃ kalyāṇa-dhammaṃ brahmacāriṃ etena dhammena paricareyyā ti methunupasaṃhitena”* (“女人の面前で自己のために姪欲供養を称賛して, 「妹よ, 我のごとき具戒者, 善法具足者, 梵行者を, この法——すなわち姪欲と結びついた [法]——によって供養する者は, 供養中の第一なり」と説く比丘は [僧残となる]”。 Cf. 平川 彰『二百五十戒の研究』I, pp. 416-416) とあり, 注釈も, Vin III 133. 21f. “*atta-kāmaṃ*” ti attano kāmaṃ attano hetuṃ attano adhippāyaṃ attano pāricariyaṃ; Sp. 551. 16f. “*attakāma-pāricariyāyā*” ti methuna-dhammasaṅkhātena kāmena pāricariyā kāma-pāricariyā, attano atthāya kāmapāricariyā attakāmapāricariyā…で *atta-kāma-pāricariyā-* (<skt. **ātma-kāma-pāricariyā-*) で解釈している。

ところが, 説一切有部や根本説一切有部の戒経では *ātmanas kāya-pāricariyā-* (“自分に対する, 体での [性的な] 奉仕”) と変わっている: PrMoSū (Sa) (Finot : 480. 2). *ātmana kāya-paric[aryāṃ]*; PrMoSū (Sa) (Simson : 73, AY h, R. 4). *[ā]tm[a]naḥ [kā]ya-parica[r](yā)[yā]*; PrMoSū (Sa) (Simson : 80, BA a, R. 2).

ā + k[ā]ya-[p]aricary[a]y.; PrMoSū(Sa)(Simson : 240, パリ写本 GI, v. 3), [ā]tmana[ḥ] kāya-pāri[caryāy]ā; PrMoSū(Mū)(Banerjee : 16. 12). ātmanas kāya-pari[caryām] PrMoSū(Mū. tib)(Vidyabhusana : 54. 2). bdag nyid kyid lus kyid bsnyen bkur bya ba'i phyir.

また、大衆部系説出世部の戒経では、PrMoSū(Mā-L)(Tatia : 9. 2). ātmikāya paricaryāye (“自己[へ?]の奉仕”)となっている。

おそらく、本来は *attam(acc.)²⁾ kāya-pāricaryāya (“自分への体での[性的な]奉仕を”)とあったと考えられる。説一切有部や根本説一切有部は attam(acc.)を ātmanas(gen.)に置き換え、大衆部系説出世部は *attam kāya あるいは anusvāra の落ちた *atta-kāya を *attaka- (skt. ātmaka-) と混同し、ātmikāye と誤った梵語化したのであろう。他方、パーリ戒経の読みは、文脈上 kāma(“淫欲”)が相応しいという意識もあったろうが、むしろ、(筆写伝承のどの段階かまだ特定できないが)書体 *y* と *m* の類似に因る誤りではなからうか⁴⁾。

$\begin{array}{l} \nearrow \Rightarrow \text{pa. } \textit{atta-kāma-pāricariyāya} \textit{ (y/m)} \\ *attam\ kāya-pāricaryāya \rightarrow \Rightarrow \text{PrMoSū(Sa), PrMoSū(Mū). } \textit{ātamanas kāya-pāricaryāya} \\ \searrow \Rightarrow *atta-kāya-p^\circ \Rightarrow \text{PrMoSū(Mā-L). } \textit{ātmikāye paricaryāye} \end{array}$

戒経の研究には諸言語で伝わる Text を文献学的に比較することが必要である。比較により、不明な語句が明らかになる場合もある。さらに諸本間の語句の違いに注目し、なぜ違いが生じたかを考察することで、その語句の本来的な意味を明らかにすることができる。この作業には中期インド語の知識も必要である。しかし、この作業を通してのみこそ、戒経の原初的な姿により正確に近づけると私は思う。

略号：

Banerjee = *Two Buddhist Vinaya Texts in Sanskrit. Prātimokṣa Sūtra and Bhikṣukarmavākya*, ed. A. Ch. Banerjee, Calcutta 1977; Finot = Louis Finot, “Le Prātimokṣasūtra des Sarvāstivādins”, JA 1913, pp. 465-558; Mā-L = 大衆部系の説出世部; MĪ = 中期インド語 (Middle Indic); Mū = 根本説一切有部; PrMoSū = 解脱戒経; Sa = 説一切有部; Simson = von Simson, Georg, *Prātimokṣasūtra der Sarvāstivādins*, Teil I, Göttingen 1986 (Sankritlexte aus den Turfanfunden XI); Tatia = *Prātimokṣasūtram of the Lokottaravādimahāsāṅghika School*, ed. Nathmal Tatia, Patna 1976; Vidyabhusana = S.C. Vidyabhusana, “So-sor-thar-pa; or, a Code of Buddhist Monastic Laws: Being the Tibetan Version of Prātimokṣa of the Mūla-sarvāstivāda School”, JASB, N.S. 11(1915), pp. 29-139; A⇒B: 語形Aが誤ってBに置き換えられた (hypersanskritism. 音変化を介在する); A⇒B: 語AがBに置換された (音

変化を介在しない場合)

- 1) Cf. K.R. Norman "The pratyeka-buddha in Buddhism and Jainism", *Collected Papers*, I, Oxford 1991, pp.233-249.
- 2) 同様に, Vin III 218. 30. ubhinnaṃ aṅṅātakānaṃ gahapatinaṃ vā gahapatānaṃ vā に対して, PrMoSū (Mā-L) (Tatia : 14. 15). anyatareṣāṃ dvinnā<ṃ> gṛhapatikasya gṛhapatiniye ca; Vin III 216. 11. aṅṅātakassa gahapatissa vā gahapatāniyā vā に対して, PrMoSū (Mā-L) (Tatia : 14. 8). anyatareṣāṃ dvinnāṃ gṛhipatikānāṃ.
- 3) Cf. skt. *pari-√car* + acc.
- 4) 書体の類似による *kāya-* と *kāma-* の混同例は法華經に見える : Kern-Nanjio. 324. 3. utsrṣṭa-kāmās/DI. Pk, P1, 2, T3, 6. utsrṣṭa-kāyās (=tib, 漢訳)

<キーワード> Prātimokṣasūtra, 律, hypersanskritism

(東方研究会専任研究員, 真宗大谷派教学研究客員研究員)

—— 新刊紹介 ——

Kōshin SUZUKI (鈴木晃信)

Index to the Sanskrit Fragments
and Tibetan Translation of Candrakīrti's
Bodhisattvayogācāracaṭṭhikā
Tibetan-Sanskrit

B5版・378頁・定価 7,725 円
山喜房佛書林・1995年 7 月